

九州支部の初めの約20年

松村 温

九州支部は昭和21年4月28日(1946年)に物理学会の発足と共につくられた。支部委員は西久光、武藤俊之助、岡崎篤義、次いで同年11月1日から岡崎篤義、伊藤徳之助、原島鮮、大森恭輔(すべて故人)となり、その補助員(この職名先日支部の記録を見て、初めて意識した)として、山下次郎と小生がその任についた。支部の範囲は、九州と広島以西の本州としたがその後、広島支部が発足し、広島以西は削り、また沖縄返還とともに、自動的に沖縄が九州支部に含められた。

日本物理学会の定款では“本会は札幌、仙台、…福岡の各地に支部を置く。”とされているが、支部名に定めはない。九州支部では初めから“九州支部”と称してきた。一方、仙台支部は初めから(数物時代からすでに)この名称を使い、東北支部なる表現は一度見たきりである。

支部の任務として、年4回(3月、6月、9月、12月)原著発表会を行うとしてある。その当時の支部会員数は、数十程度と思われる。会員は、九大以外では、旧制高校、旧工専、气象台などに属していた。小生は昭和17年12月に、当時の数物(日本数学物理学会)に入会し、20年12月に、会員は夫々数学会、物理学会の会員となった。(数学系約600、物理学系約1800)数物の解散時の財産総計約136kYである。

支部費400円の予算で第1回支部例会を、昭和21年9月に開いた。以後、第41回支部例会(昭33・6)まで支部規約通り開いた。第42回は、講演申込がなく、1回ぶん期日をのぼして、昭和33年12月に熊本大学で行った。第1回例会から第41回までの原著講演の平均は 7.67 ± 3.25 となった。そのあいだ、昭和24年度の学制改革によりいくつかの大学において物理学科新設、また教養部での物理学担当教員の増加などにより、会員数が増加したことが、支部例会をどうにか規約どおりに開けたことの因になったと思われる。

支部例会の案内などは、すべて手書きの謄写版(ガリ版)によっていた。ジアゾ感光紙によるコピーはあまり実用的でなかった。36、37回(支部創立10周年記念例会)、邦文タイプライターを使つての謄写版であった。(当時の補助者の方が、事務室に頼んだものとおもわれます。)

いずれにしても、相当の量の講演申込を得るには、ある程度の働きかけが必要であった。小生は“廊下トンビ”を、実験室、研究室でして回った記憶がある。

“ピラ”(語源は英語のbillとのこと)講演をする時、必要な数式、測定結果などをあらかじめ模造紙(印刷局紙(和紙)を洋紙で模造した紙)に、筆と墨とで書い

た物を“ビラ”とよんでいた。(大きさは今のOHPのスクリーンと同じ位)筆で直線を引くには特別な定規が要り、レタリング、セットも特別なゴム判があった。洋紙に墨で書くと、乾くのにはかなりの時間がかかるもので、なかには墨がたれてくるものもあった。補助員はこのビラを講演席の横にぶら下げる道具を準備する役目がある。これは、材木を2本T字型につけ、そのT辺の表裏から数本の釘を打ち通したものである。(形や大きさは野球場で土をならすのに使う道具(トンボ)に似ている。)(ビラ掛け。)講演者からビラをあずかり、指定の順番に紙を針にさして止め、裏に突き出た釘によって黒板、または適当な所に張った針金にぶら下げる。講演者は話の進行に応じてビラをとってゆく。その後マーカー(マジックインク)(日本での発明、1950年ごろ)の発売によってビラづくりはだいぶ楽になった。いずれにしても、昨今のスライド、OHP、またpre-printなどの充実には今昔の感に堪えない。